

キトキトまちづくり 藤子Aワールドの商店街

——富山県氷見市比美町商店街を訪ねて——

文責：氷月 あや @ 駆け出しの作家

氷見市の比美町商店街のまちづくり事業に取材したノンフィクションを、現在執筆中です。

12月末日〆切で、本章は「星海社ジセダイ」にてWeb公開されます！

星海社ジセダイ ミリオンセラー新人賞 <http://ji-sedai.jp/school/award/>

序章

氷見駅のプラットフォームに立つと、潮風が薫った。

家族水入らずの乗客たちが、次々と列車を降りる。2両編成の気動車だ。彼らを見送った列車は、のんびりと扉を閉めた。

名残を惜しむように、列車の写真を撮る乗客の姿もある。

爽やかなブルーに塗装された列車のボディでは、忍者ハットリくんと仲間たちが、忍法ムササビで氷見湾の上空を滑空している。

2012年5月5日、こどもの日。

私は富山県氷見市を訪れた。

氷見市は、『忍者ハットリくん』の作者・藤子不二雄A先生の生まれ故郷だ。こどもの日がハットリくんの誕生日であることにちなんで、氷見市では5月5日に“藤子Aワールドまつり”が開催される。今年で2回目だという。

午前11時少し前。

何組もの家族連れに混じって、私はこぢんまりとした氷見駅を出た。

駅前のロータリーには、タクシーが1台、客待ちをしていた。さすがはAワールドのまち、氷見だ。タクシーのボディでも、どんぐりまなこのハットリくんがスマイルしている。小さな男の子の兄弟が、タクシーに駆け寄って歓声をあげた。

と、運転手さんがタクシーを降りて、小さな兄弟のほうへ、腰をかがめてみせた。

私は目が点になった。

運転手さんはハットリくんだった。

いや、まんがの中のハットリカンゾウくんより40年ばかり余分に修行を積んでいる様子ではあるが、青い忍装束に青い頭巾は紛れもなく、あの伊賀流の少年忍者スタイルだ。忍刀を背負っていないのは、運転の邪魔になるからだろうか。

運転手さんが「ニンニン」と言って印を結んでみせると、小さい兄弟が、笑い声をたてて喜んだ。

さすがはAワールドのまち、氷見だ。私はワクワクした。楽しい1日が過ごせそうだ。

藤子不二雄A氏（本名・安孫子素雄氏）は1934年、富山県氷見市に生まれた。A氏の実家は、光禅寺という曹洞宗の総本山だ。

A氏は1944年に父を亡くし、母方の伯父を頼って、一家で富山県高岡市に転居した。転校先の小学校で、藤子・F・不二雄氏（本名・藤本弘氏）と出会い、2人でまんが家を目指すようになる。

A氏とF氏が藤子不二雄の合名でデビューしたのは、1951年。両氏は高校生だった。以後、1987年のコンビ解散まで、両氏は藤子不二雄の合同ペンネームのもとに、日本のまんが史に残る名作をいくつも生み出した。

藤子不二雄の合同ペンネームが冠された作品であっても、A氏とF氏は、ある時期からは別々に執筆活動を行っていた。

A氏の代表作を挙げてみたい。

伊賀の少年忍者・服部貫蔵が東京で居候生活。忍術コメディ『忍者ハットリくん』。怪物ランドのわがままプリンスが人間界でコミカルに大騒ぎ。『怪物くん』。野生育ちの中学生・猿谷猿丸が超絶技巧のゴルフ対決に挑む『プロゴルファー猿』。いじめられっ子の浦見魔太郎のオカルティックな復讐劇『魔太郎がくる!!』。喪黒福造が人間の本性をあぶり出す。現代人のための寓話集『笑ウせえるすまん』。A氏談「実話7割、フィクション3割」。2人のまんが青年を描いた『まんが道』。作家・柏原兵三の小説『長い道』を、富山を舞台にまんが化した『少年時代』。

私の個人的な話をすれば、初めて出会ったA氏の作品は『ビリ犬』だった。次が『パラソルヘンベえ』だったと思う。どちらもお気に入りのテレビアニメだった。

現代っ子の場合は、大野智が演じる怪物くんがA氏の作品への入口となるのかもしれない。あるいは、香取慎吾が演じるハットリくんがAワールドの水先案内人だ、という読者もいるだろう。

リアルタイムで『笑ウせえるすまん』を読んでいた世代には、“モーレッツ社員”と

いう響きが懐かしいはずだ。

昨今のゴルフブームを受けて、少年まんが史上最初のゴルフ作品『プロゴルファー猿』を手を取った読者もいるのではないだろうか。

こうして並べてみれば、藤子不二雄A氏が子どもから大人にまで愛されるまんが家であることがよくわかる。

氷見駅からA氏の生家・光禅寺へ向かう道すがら、比美町商店街でたくさんのAワールドキャラクターたちと出会った。

A氏が手掛けた比美町商店街のオリジナルキャラクター『氷見サカナ紳士録』。氷見の漁港で下船する“水も滴る美味なおトコたち”が、シルクハットや蝶ネクタイでおしゃれをして、観光客の私を歓迎してくれる。

アーケードの天蓋を支える柱には、ハットリくんや仲間たちの大判ステッカーが貼られている。寂しげに下ろされたシャッターにも、ごきげんな忍者たちが描かれているから、見ていてほっこりした。アルミ製のフィギュアもたくさん置かれて、にぎやかだ。

一直線の商店街とクロスして流れる湊川には、幾何学的なデザインのオブジェ「虹の橋」が架けられている。この虹の橋には、忍者ハットリくんカラクリ時計という別名がある。定時になると、ハットリくんが現れ、ライバルの甲賀忍者ケムマキと、水を使った忍術対決を繰り広げるのだ。

私が特に感銘を受けたのは、Aワールドまつりの明るい雰囲気と、商店街の大人たちが笑顔で頑張る姿だった。

商店街のあちこちで、A氏の作品をモデルとした手作りのアトラクションが催されていた。それを運営する大人たちは皆、Aワールドのキャラクターに扮していた。

もしくは、大人になったAワールドのキャラクターたちが商店街じゅうにいた、と表現してもいいかもしれない。最初から大人のキャラクターたちは、本当に違和感なく、まさしく彼らだった。

私の中で好奇心が膨れ上がった。

一体どういう経緯があって、氷見市はこうしたまちづくりを進めるに至ったのだ

ろう？

2012年9月末。

私は再び氷見市を訪ね、Aワールドのまちづくりに携わる人々の話をうかがった。そこから知り得た事実を、これからこの本にまとめていく。

全体を3章に分けて構成した。

第1章 過去 ～「天の時、地の利、人の和」を以てハットリくん参上！～

第2章 現在 ～忍者と怪物と猿とせえるすまんと、北陸美味のまち～

第3章 未来 ～藤子不二雄A氏の頭の中は、未来のまちのあるべき姿～

これは「観光客へのアピールが上手な商店街のサクセスストーリーを紹介する」ための本ではない。

藤子不二雄A氏のキャラクターを商店街に住ませたことで、氷見のまちでは、A氏の作品が持つ世界観を身近に感じられるようになったという。それはどういう意味なのか？

商店街の人々からその答えを聞いたとき、私は「まちづくり」という言葉が持つ重みを初めて発見した。

ただ1度のイベントをきっかけに、私はあのまちが好きになった。

そもそも氷見に縁もゆかりもない私が、どこまで正確に氷見の魅力・Aワールドの魅力を伝えられるか、本当のところ自信がない。けれども、書かずにはいられない。

この本を通じて、A氏の作品を知るあらゆる人々に、Aワールドのまちづくり事業が持つ輝きを少しだけでも届けたい。

小難しい本にはしないつもりだ。未来のまちづくりを担うティーンエイジャーにも読みやすいような本にしたい。

読者諸兄氏、ここはひとつよろしくお頼み申すでござる。ニンニン。